

留学生センター ニュースレター

第3号

11.18,2004

特集

留学生センターが考える大学の国際化

留学生センターが取り組んでいる教育・研究活動の紹介を通して
大学の国際化について考えたいと思います。



留学生センターに期待すべき役割

～新センター長就任の挨拶に代えて～

留学生センター長 ジョン・G・ラッセル

今年、留学生センターは8年目を迎えます。この8年間に留学生センターも岐阜も日本も変わりつつあります。毎年、日本で学ぶ外国人留学生の数が増加しつつあり、地域的にも全国的にも日本の国際化が進んでいます。今年、岐阜大学の留学生の総数は既に390人を超えました。このような状況の中で、センターは国際社会に重要な貢献をしています。その一つは日本語・日本文化を学習するための快適な環境を提供することと、

日本人の学生と留学生同士の文化的交流をはじめとして、地域との交流を推進することです。

我々は技術的にも社会的にも激動している世界に住んでいます。このような急速な変化は人間社会の進歩に貢献している一方、様々な対立と誤解を引き起こしていることも事実です。グローバル化世界と言われている現代において、文化的な多様性に対応できる人材を作ることが、どの国にとっても緊急に挑まなければならない課題の一つです。グローバル化しつつある21世紀に対応するためには、高等な技術の知識だけではなく、他文化を理解し橋渡しすることができる人間を育成することと、国境を超えるIntercultural Literacy (異文化リテラシー) も必要とされています。そのプロセスに留学生センターが重要な役割を果たしつつあると期待しています。

日本語日本文化研修プログラム

—短期留学から広がる国際性—

留学生センター教授 牟田おりえ

「日研生」プログラム3年目の2003/4年度は、6人の日本語・日本文化専攻の学部生が留学生センター所属の国費留学生として1年間勉学に励んできた。派遣校はスウェーデンの Lund 大学、タイのチュラロンコン大学とカセサート大学、シンガポール大学、中国の広西大学と吉林大学である。全員、「超」真面目な学生で、小論文とセミナー発表まで1年間の留学を修了して帰国した。

初めての日本で6ヶ月目には日本語による論文を書かせ始めるわけだから、論文指導する私達にとっても手間暇のかかる作業である。しかし、そんな苦勞も2期目の卒業生ジェシカ・マカイ(グリフィス大学法学部)からの便りで、喜びに変わった。岐阜大学の日研生としての修了論文「不法滞在者:日本とオーストラリア」が全オーストラリアの法学部生・大学院生対象の論文コンテスト「Blake Dawson Waldron, Australian Network of Japanese Law Competition in Japanese Law」で特別表彰されたというのである。この論文の成功の陰には地域科学部の近藤真先生のご協力があった。この場を借りて御礼申し上げます。

2003/4年度の卒業生達がどんな進路を辿るのか楽しみである。Lund大学のジェニーは帰国後、日本語科を続けながら、競争率の高いジャーナリズム学部大学院に入学し、数少ない日本語のできるスウェーデン人ジャーナリストとしての道を目指しているようである。



修了生からのメッセージ



ジェニー・ルースさん(スウェーデン・Lund大学)

私が岐阜大学で日本語・日本文化研修プログラムに参加して10ヶ月がたった。これまでの10ヶ月の岐阜での生活を通して、より日本語と日本文化の興味が深まった。このプログラムのおかげで日本人や世界中の多くの友達もでき、多くの経験が出来たことを感謝している。

岐阜大学の日本語・日本文化研修プログラムの中で良い点はたくさんあると思うが、ここで二つの良いことを挙げたい。一つはプログラムの広さと深さということである。このプログラムの学生は日本語教育の中でも、日本文化・社会の中でもいろいろなことを勉強できる。この教育の広さは本当に良いと思う。学生は色々なことについて勉強しているから、何にでも興味が持てる。したがって、このプログラムは学生にとって日本語の学習に非常に役に立つと思う。もう一つは先生達である。このプログラムの先生達は日本語や日本文化を教えることに打ち込んでいるから学生にいい影響を与えようと思う。一方、このプログラムは良い点だけではなく一つの問題点もあると思う。それは宿題、テスト、発表、レポートなどの量である。色々評価する方法は非常に大切であるが、重要なのは宿題の質であって量ではないと思う。また、文化や社会制度は自分の国と違うのでストレスや疲れがたまりやすい。しかし、全体的に見ればこのプログラムはすばらしいと思う。一年間日本語・日本文化研修プログラムに参加するために日本に来られて本当によかった。好機は二度訪れないからである。



スドヨードロ・ベンチャラックさん(タイ・チュラロンコン大学)

この一年間、岐阜大学の日研生プログラムに参加することは私にとって、貴重な経験である。日本語の能力だけでなく、様々なことも勉強できるようになった。日本文化や社会なども面白く勉強した。先生や友達も優しく、何か問題があれば、相談できて、よく助けてもらった。また、日本人と交流会なども楽しくいい勉強になった。国際交流会館でも様々な国からの友達が作れて、相手の文化や考え方を理解する機会があって、視点も広げた。新しいことをいろいろ挑戦して大変楽しくて成長できた一年間だと思う。授業が難しく、忙しいが、いい思い出も一杯作れて、今は、このプログラムに参加してよかったと思う。

2004年11月タイ留学フェア会場にて。岐大ブースで手伝ってくれたベンチャラックさん(写真右端)と岐阜大学留学生OG 左端は同期日研生だったラックワンさん(カセサート大学)

センターが取り組む日本人の留学派遣



留学を終えて

長屋久将 (地域科学部4年)

「英語を話したい。」これまでに、そう思ったことのある人は多いと思います。私は語学留学を経て、語学習得以上の意味を体感し、ノーザンケンタッキー大学へ交換留学しました。現地の在學生と同じ立場で勉強し、また寮生活を通して直にその大学生生活を体験したいと思ったからです。私にとって毎日が新鮮で、新たに発見することも数多くありました。最初は文化や考え方の違いに戸惑う

こともありましたが、次第にもっと知りたいという未知の世界への好奇心へと変わりました。授業形態においては、教授と学生との距離がなく、そのカジュアルな雰囲気良かったです。質問も個別に受け付けてもらえました。英語以外にも文化人類学、地理学、アメリカ史などの授業をとりました。語学留学時代とは違い、アメリカ人や他の留学生と深く付き合うことも

できました。ルームメイトが、サンクスギビングやクリスマスに、家に招待してくれました。TV等でしか見たことのなかった光景のなかに自分がいることに感動しました。3年次に岐大において受講した講義で、戦時中の日系人収容所についての講義がありました。旅行の際、収容所で亡くなった方々の慰霊碑を訪れました。実際に彼らが残した言葉、名前が彫られた石を前に、当時のことを思ったことを覚えています。

新しく学ぶこと、発見すること、それは大学内だけでなく、寮生活、旅行中、人と接するとき、あらゆる機会において存在し、私にある大きな価値観を与えてくれました。それは、「人それぞれ」ということです。自分と違う価値観は、必ずしも間違いではないのです。自分と違うから、あるいは自分たちと違うからといって、それは否定されるものではありません。もしかしたら自分の価値観のほうが受け入れ難いものかもしれません。生まれも国も育ちも歴史的・文化的背景も全く違う環境で生きてきた人々のなかで留学生活を送り、相手を尊重し、そして自分を主張するという、上手に価値観を共有する大切さを学びました。

留学派遣担当者から

太田孝子 (留学生センター教授)

留学に関する相談で入室する日本人学生が増加している。

長年「留学」の夢を持ち続けてきたとは言うものの、明確な留学の目的を持っている学生はそれほど多くはない。留学のために、いつ何を準備し、どのように実行すればよいかわからない学生がほとんどであるため、留学前の準備期間の充実を図ることが現在の課題となっている。そのため留学生センターでは、今年前半は留学生課と協力して、サマースクール説明会(4月に2回実施)や留学説明会(6月30日に実施)、留学体験者との交換会(各説明会および7月1日実施)、サマースクール参加者に対する「事前英語学習」(7月～8月に30時間実施)、「異文化理解セミナー」(8月2～3日に各4時間実施)などを行なって、留学の内実を伝え、各自の準備を支援してきた。このような機会を通して留学に対する幾つかの不安を取り除き、事前に必要な準備や心構えを伝えることはできたと考えている。

留学希望者各自がそれなりにこだわっているものを大切に、異なる文化の中で柔軟な対応をしつつ、何らかのものを得て、また元気にキャンパスに戻って来てほしいというのが派遣に携わる者としての一番の願いである。

2004サマースクールを終えて

森田晃一 (留学生センター教授)



恒例のサマースクールが、今年は異常な猛暑のさなか、6・7月の2か月間の日程で実施された。8週間コースにはスウェーデンの Lund 大学から18名、3週間コースには韓国のソウル産業大学から5名、合計23名が参加した。この間学生たちは、日本人学生チューターとともに大学の研修施設に宿泊し、毎日の日本語講義、日本事情講義、岐阜市と郡上市でのホームステイ、明治村・大相撲名古屋場所・関の刀研ぎの見学、京都への研修旅行などの内容を、じつに積極的に取り組んでいた。

最終日の「まとめの会」では、サマースクールのプログラム全般に対して、学生側から高い評価を得ることができ、関係者一同ほっと安堵した。また、改善すべき点も率直に聞くことができたのでより良いプログラムになるよう決意を新たにされた。なお、日本人学生チューターにとっても、異文化の理解という点で、貴重な学習機会になったようである。

歓送会には、100名におよぶ人々が集い、会場を満員にする盛会ぶりだった。参加学生の巧みな日本語スピーチに感心し、期間中のさまざまな思い出に浸りながら時は過ぎたが、しだいに別れの時が迫ってくると、その辛さゆえか涙ぐむ人々もあちこちで見られた。

サマースクールに参加して

イ チュヒョン (ソウル産業大学)

ここに来る前には日本人と直接接して見る機会がなかったし、ただテレビや新聞、本などを通して接するのが全部でした。日本に来てみたら、聞いたとおり行く所ごとにきれいな街と親切な人々が私たちを迎えてくれました。特にホームステイをしながら日本文化を体験して、感じて、学ぶことができました。

ほんの3週間の短い期間でしたが、日本と日本人、日本文化を理解することができる貴重な時間でした。これから機会があれば日本にまた来てもっとたくさん学びたいです。最後に、今まで手伝ってくれたすべての方々にもう一度感謝いたします。



研究者紹介

今回は、留学生センター・牟田おりえ教授の研究テーマを紹介します。

2004年7月、「第15回アジア研究学会」がオーストラリアの首都キャンベラで行われた。政治・経済から文学・日本語教育までを含むパネルが多数あり、私は「漱石におけるアンドリュウ・ラング受容」と題して、漱石がラングの影響を直接的に受けた作品を残していること、それが彼の近代化論とどうかかわるかを論じた。

ラングは英文学史で「最後の包括的知識人」と称される人物である。日本ではほとんど研究されず、知られていないが、私のラングへの関心は、児童文学と人類学分野での彼の主張だった。その研究過程で、漱石がロンドンでラングの本のとりこになったことを知った。ラングはグリム童話以降のフォークロア・ブームの火付け役を果たし、また作家としても優れたファンタジー作品を残している。私がオーストラリア児童文学と日本文学とを同時に研究対象としているのを認めてくれるのは、ラングのような人だけかもしれない。ラングは人類学分野でも、西欧優越主義的視点で新世界を見る人類学者が多かった時に、比較文化論的視点から、新大陸の「未開人」と西欧「文明人」との間に共通点を見た。この点も、科研（『英語圏児童文学史』再構築のためのカナダ・オーストラリア児童文学研究）の共同研究者と共編著で出した『はじめて学ぶ英米児童文学史』（ミネルヴァ書房2004）にカナダ・オーストラリアを英米と肩を並べて位置付けたことで、ラングに共通の視点と言えるかもしれない。

彼は対象が子どもであれ、大人であれ、同じテーマを違う言葉で語り、学界の権威者をも躊躇なく批判したアマチュアであった。彼のトーテミズム論はフロイトにも引用されている。ラングのような比較・複眼的視線を通してこそ、自由で平等な見方が生まれるのだと思う。いみじくも環境哲学者が述べている。「問題は私たちが何を見ているか、つまり、世界-地球ではなく、私たちが何を基準に見ているか、つまり私たちの世界観、私たちの理性、私たちの文化とその言葉である」（T.D.J. Chappell (ed.), The Philosophy of the Environment, 1997）これは、全学共通科目「児童文学と自然保護思想」でまず最初に紹介する文である。世界観を広げることが環境問題だけでなく、人種問題その他あらゆる問題解決に重要な点であり、私にとって研究とは、世界観を広げ、よりよい教育ができるよう、個人的にも心豊かな人生を送る手段であり、目的である。「アンドリュウ・ラング：フェアリー・テールと人類学の接点」は『児童文学の黄金時代』（ミネルヴァ書房2005刊予定）の1章として出版される予定で、目下漱石とラングの接点に関する論文を執筆中である。



大学の国際化を考える



留学生センターでは、大学の国際化に先駆的に取り組んでいるシドニー工科大学から、ケイト・パークレー博士をお招きし、その取り組みについてお話いただきました。

大学教育における短期留学の必要性 - シドニー工科大学の取り組み -

6月18日金曜日に行なわれたこの講演会では、シドニー工科大学（以下UTS）が行なっている「1年間の短期留学を組み入れた学士プログラム」についての詳細な紹介があり、その考え方の新しさもさることながら、これをUTS全体がバックアップする体制をとっているという事実にもむしろ新しさを感じた。教育制度の違いなどから、日本の大学で二重専攻などを取り入れることは難しいが、今回の講演で紹介されたUTSの取り組みは、学生のみならず、教官や学内にも大いに刺激を与えるものであった。

(橋本)

留学生センター開講日本語コース参加者 2004年春期&秋期

	2004年度 春期	2004年度 秋期
日本語研修コース	31(うち交換留学生8名)	36(うち交換留学生8名)
日本語・日本文化研修プログラム	6	3
全学向け日本語補講コース	76	61

留学生センターからのお知らせ

4月から、留学生センターに、学生相談室が新しくできました。留学や生活などについて相談したい人は、気軽に来てください。